health care report

Soleil

2011 2

それいゆ

vol.134

株式会社 ヘルスケア経営研究所

check point

今月の

経営チェックポイント

ことばチェックポイント147

（ことば146からの続き）

咳エチケット②

②鼻汁・痰などを含んだティッシュはすぐにゴミ箱に捨てる、といった内容である。また、マスクの装着によりウイルスを含んだ飛沫の吸入を完全に予防できるわけではないが、咳エチケット用には、薬局やコンビニエンスストア等で市販されている不織布製マスクの使用が推奨されている。インフルエンザの事前対策や発生時の対応として、平成22年11月に改訂された「インフルエンザ施設内感染予防の手引き」を再確認されては如何だろうか。

（http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou01/dl/tebiki22.pdf）

3 極寒時期、気にすべきこと

一年でもっとも寒い時期を迎えております。この時期に気をつけていただきたいことは、インフルエンザやノロウイルス等の感染対策です。

ノロウイルスの症状は下痢、吐き気、おう吐、腹痛、発熱などですが、感染者の中には症状が出ない人もいます。症状の有無にかかわらず、手洗い・うがい、舌苔のチェックを徹底されますようお願いいたします。とくに舌苔については見落とされがちですが、これは、全身疾患にも関わってくる問題です。

また、在宅医療など、職員が外出した時は、手洗いが出来ない状況も想定されます。該当する職員には、消毒スプレーを携帯させるなどの取り組みも大切です。

これらの病気は、通常、死に至る病気ではありませんが、高齢者や小さな子供など、免疫力が低下している場合は重篤化します。万が一の事態を防ぐためにも、まずは職員側の予防が第一です。

近年は、職員の雇用体系も多様化し、子どもを抱えつつ、あるいは介護が必要な親を支えつつ、仕事を続けるケースが増えていますが、この時期に危惧されるのは、インフルエンザ等により休暇を申請されることです。申請はやむを得ないとしても、数日にわたる場合、届出に影響が起きたり、他の職員のモチベーション低下にも繋がります。あらゆるリスクを想定し、職員だけでなく家族の病時・後のサポート体制についても日頃から整備しておく必要があります。

4 理念を見直し、新年度の準備を

2月のこの時期にぜひ行っていただきたいことに、理念や方針や就業規則の見直しがあります。

これらの見直しは、「随時」行っていくべきものですが、とくにこの時期に再度のお奨めをいたしますのは、4月に就職する新入職員の皆さまに、自院の理念や方針、就業規則を最新の状態でお見せすることができるからです。

本稿では、繰り返し、繰り返しお伝えしておりますが、理念と方針は、それを作るだけでは何も変わりません。まばゆいばかりの立派な理念を掲げているものの、全く機能していない組織もたくさんあります。

理念や方針が言葉の羅列にとどまっている組織というのは、総じて、開設者と働く人々との温度差が大きいようです。

逆に、理念や方針が管理者だけのものでなく、働く人々にまで浸透している組織は、その想いを「共有化」できているため、問題や課題が生じても「できない理由」ではなく「どうすれば出来るか」ということを考えます。

なぜ、この理念を作り、方針を策定したのか、そこに至る経営者の想いをもっともっと伝えていかなければ、組織内の士気を保つことはおろか、行動規範、行動指針へ繋がることはあり得ません。

いうまでもないことですが、医療や介護を担う組織の成長は、人のチカラであり、それを結集させるのが、理念や方針です。

（萩原　輝久）

イキ！イキ！現場リポート

医療法人 慶裕会 吉野整形外科

YOSHINO ORTHOPEDIC CLINIC 医療法人慶裕会 吉野整形外科

〒221-0002 神奈川県横浜市神奈川区大口通56-5 大口メディカルセンター 1階
http://www.yoshino-seikei.jp/

地域的なケアから高度な最先端医療まで

今回ご紹介するのは、横浜市にある吉野整形外科です。特徴は診療圏の広さです。通常、都市部のクリニックの場合、診療圏は、1キロから2キロといったところですが、同院には、日本国内はもとより韓国やハワイ、オーストラリアなど国外からも患者がくることがあります。吉野匠院長にお話しを伺いました。

▲ 吉野 匠　院長

順天堂大学医学部卒業後、慶應義塾大学医学部整形外科学教室入局。済生会横浜市南部病院勤務等を経て、2003年、吉野整形外科開業。2005年、東邦大学医療センター大森病院膠原病科入局（研究医）。

ホームページを見て海外から

吉野匠院長の専門は、「足」。とくに、外反母趾の治療には定評があり、メディアに取り上げられることもよくあります。

外反母趾は、足の親指が変形して小指側に曲がっている状態をいいます。原因の一つにハイヒールなどの靴による影響が多分にあるため、患者の8割が女性と言われていますが、必ずしも靴による影響だけが発症の要因ではありません。身近な病気ですが、徐々に進行していくため、気が付いたら酷くなっていたという人が多いのも現状です。

吉野整形外科は、2003年の開業当初からホームページを通じ、外反母趾の病態や予防策、治療法についての情報提供を行ってきました。遠方からの患者は、このホームページを見て受診されるそうです。

今日、インターネット上には、外反母趾の情報が氾濫していますが、その中でも同サイトへのアクセスが多い理由は、病態に関する説明が詳しくわかり易いことにあります。実際に外反母趾で悩んでいる患者にとっては、とても共感しやすい内容となっている点が信頼に値しているのでしょう。

ライトサーチ

ホームページ紹介

吉野整形外科のホームページは、院長の手作りサイトです。「専門知識の少ない患者さんにできるだけわかりやすいように」と写真を多用し、日々工夫を凝らして更新しています。何より整形外科医の立場からEBMに基づいた説明が丁寧で安心できます。その一部をご紹介します。

外反母趾(がいはんぼし)が進行すると・・・

外反母趾の人の足の裏を見てみると、ときに足の人差し指の付け根や小指の付け根などに胼胝(ベンチ・タコ)を形成し、その部位に痛みが生じることがあります。これらの胼胝(ベンチ)は足の"横アーチ"が低下することにより、中足骨頭が足底に突出し、繰り返し動作の際に中足骨頭に負担がかかるために生じるものです。

外反母趾では親指で蹴り返すことが出来なっているため、代償性に他の指(特に第2趾)が蹴り返す役割を担うことになっているのです。

また、親指の付け根の内側の突出部が靴に当たるなどの刺激を受け、"バニオン(Bunion)"と言われる滑液包炎を生じ「はれ」や「発赤」、「疼痛」を伴うことがあります。

さらにその突出部には親指に行く知覚神経が通っているため、その神経が圧迫されることにより親指にしびれや痛みが生じることもあります。

また足の形態異常のため筋力バランスが崩れ、歩きにくく疲れ易いと言った症状も呈します。足のアーチの低下は長期的には足関節の疼痛や変形をも引き起こします。

さらに、外反母趾が進行すると親指が第2趾や3趾の下に入り込むようになり、これらの指が持ち上げられると同時に付け根にある関節が背側に脱臼してしまうこともあります。

また、親指は捻れながらくの字に曲がるため、体重の負荷が爪の側面に加わることとなり、親指の爪は次第に巻き爪となってしまうこともあります。

こういった諸々の症状は、すべて足のアーチの潰れが招いた結果と言っても過言ではありません。

▲ホームページの更新は、一朝一夕にはいかない地道な作業です。忙しい業務の合間に続けることは難しいことですが、こういった日々の努力が世界につながるクリニックの窓口となっているのでしょう。

インソール外来

外反母趾の保存療法として最も有効なのが足底板(インソール)を用いた治療法です。インソールを靴の中に挿入することにより、足裏のつぶれたアーチを持ち上げて足の変形を矯正するのです。同院では、週に3日インソール外来を開設し、この対応にあたっています。

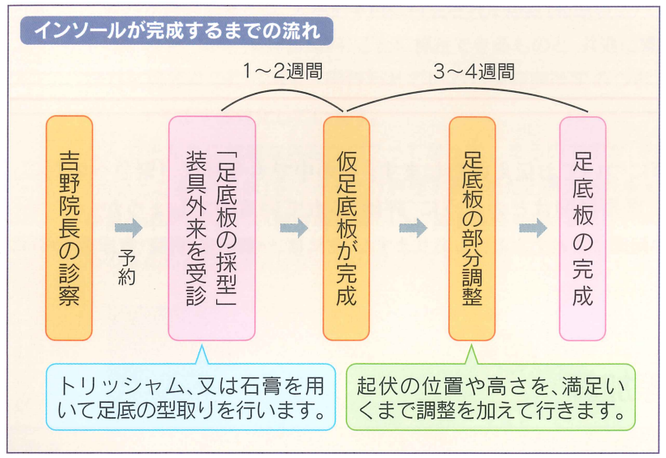
インソールの製作は、専門の義肢装具士と協力して行われます。市販のインソールでは、その人の足にジャストフィットするものは望めませんが、ここでは患者の症状、外反母趾角や足のアーチの計測、膝・腰のレントゲンや歩行癖のチェックなど、診察で得られた詳細な情報をもとにインソールを作成していきます。

まずは、採型材料を用いて作成された足型をコンピューター処理し、基本となるインソールを作成します。これに微調整を加え完成品に仕上げて行くのです。医師の診察で治療に必要と診断されれば保険適用も可能です。

外反母趾連携(他職種連携・多職種連携)

外反母趾の原因の多くは、サイズの合わない靴や高すぎるヒールを履き続けていることにあります。同院では、この点に着目し、靴の処方も行うと同時に、靴店からの紹介患者も積極的に引き受けています。

たとえば、百貨店の靴売り場には、シューフィッター(※)という靴の専門家が在籍しています。彼らは、彼らの顧客のうち、より専門性の高いインソールを必要とする方を同院へ紹介します。同院では、こうしたケースに対し、単にインソールを作成するだけでなく、それを入れて履く靴の指導も丁寧に行います。そうすることで靴店との連携は一層深まり、潜在患者の掘り起こしにも繋がっています。



※シューフィッター：足の疾病予防の観点から正しく合った靴を販売するために、足に関する基礎知識と靴合わせの技能を習得した人。資格の有効期限は3年。初級、中級、修士と3つのグレードがある。

手術が必要な場合は、連携先の病院に出向し院長が執刀します。院長は慶應義塾大学医学部整形外科学教室の足の外科班にスタッフとして所属していますので、大学病院との連携体制も整っています。最先端医療の専門性とかかりつけ医としてのきめ細やかさを同時に実践している同院は、一貫したサポートが受けられるクリニックとして患者から抜群の信頼を寄せられています。

止むことのない向学心

同院は、インソール外来(装具外来)の他にも、リウマチ・膠原病外来、手の外科外来、脊椎外科外来、リハビリテーション外来、スポーツ整形外来など各種専門外来を設けています。いずれも大学等から専門医を招き、質の高い医療を提供しています。

「大学との連携は今後も深めて行きたいですね。最先端医療に触れる事で患者さんにつねに最良の治療法を提供できますし、何より自分自身のレベル向上にもなりますから。」

吉野院長は、数年前から診療の傍らに大学院にも通いリウマチ・膠原病の研究を行っています。

きっかけは、関節リウマチの患者でした。関節リウマチを始めとする膠原病患者の多くは関節の痛みで整形外科を訪れます。しかし、その中には内科的治療を必要とするケースが少なくありません。軽快と増悪を繰り返し、長い経過をたどる疾患もあります。こうした患者に時間をかけて話を聞きながら心身共に患者をサポートして行く、いわば内科的な姿勢で治療にあたることに、これからの整形外科クリニックに必要と思われる大切な視点を見出したそうです。本年2月には研究成果が認められ英文誌"Internal Medicine"にその内容が掲載されました。

今後は地域の訪問看護ステーション等と連携し、在宅におけるリハビリテーションにも力を入れていくとのことです。

(瓜生　千鶴)